

トルストイと過ごした時代

小川 哲
Ogawa Satoshi



読書家には、神経質な読書家とざばらな読書家がいると思います。神経質な読書家は表紙に傷がつかないよう気をつけたり、帯を綺麗に保存したりします。表紙が破れればがかりしますし、ページに折れ目がつくことを嫌がります。僕はずばらな読書家なので、本なんて中身さえ無事ならどうなってもいいと思っています。帯は読むときの邪魔なので捨ててしまい、気に入った表現を見つければ線を引いたり、ページを折ったりしてしまいます。鞄に入れたまま破れたり、コーヒーをこぼして染みができたりしても、文字さえ読むことができれば問題ないと思っています。

実は読書家にはもう一種類存在するのですが、それは僕の父です。僕の父は極端に神経質な読書家でした。極端に神経質な読書家は、他のすべての読書家と違います。まず、表紙の劣化を防ぐために、何があつても書店カバーを外しません。しかし、書店カバーを外さないまま本棚に並べてしまうと、書名や著者名がわからなくなってしまいます。それでは困るので、書店カバーの上から背表紙にタイトルと著者名を自筆で書くのです（最近

はテープラを使うようになりました。読了した本のタイトルの下に「小川」の印鑑を押して、どの本を読み終えたかわかりやすくします。僕の父は、所有する何千冊もの本のすべてにそうしていたのです。

父の書斎にあった本棚は一面が茶色で（昔の書店カバーに茶色が多くたのか、書店カバーが劣化して黄ばんだ結果なのかはわかりません）、すべての本に父の特徴的な字でタイトルと著者名が記していました。そして、書斎に入りきらない蔵書が、僕や妹の部屋に置かれていました。

溢れ出した父の本は僕のベッドの横に置いてありました。僕は子どものころから、毎晩眠るときに父の蔵書と向き合っていたのです。ちょうど僕の目線の位置にあったのがトルストイのゾーンで、つまり僕は十年以上、父の字で書かれたトルストイの著作と向き合いながら寝ていたのです。

僕が早熟の天才少年であつたなら、それらの著作に若いころから慣れ親しんだのでしょうが、そういうわけではありませんでした。ディケンズならまだしも、トルストイは子ども用の本ではありません。それゆえ『アンナ・カレーニナ』や『戦争と平和』、『イワンのばか』などといったタイトルと、それを書いたトルストイという名前は長年僕の謎でした。それらの本は僕が本を読むようになるよりもずっと

と前から目の前にあって、それでいてとても遠い場所にあったのです。まだ子どもで、トルストイがどこの国の人かも知らなかつた僕にとって、『戦争と平和』は自分に関係のない本だという認識でした。「戦争」も「平和」もよくわかりません。おそらく自分には理解できない難しいことが書かれているのだと思つていました。

一方、僕はたまに（なかなか寝付けない夜など）『アンナ・カレーニナ』がどんな本なのか想像しました。当時の僕が好きだったのは『エルマーとりゅう』という児童向けの本で、エルマー少年が竜の背中に乗つて冒險をする話でした。僕は『アンナ・カレーニナ』も、きっとどこかの島を冒險する話だと考えました。子どもの僕の頭では『アンナ、カレーにな』という理解をしており、アンナという女の子が、おいしいカレーがたくさん作られるインドの島で冒險をするのだと思つていました。

『イワンのばか』に関して言えば、「ワン」が犬のことだろう、という前提から、ちょっと頭の悪い犬の話を想定していました。そんなことを考えながら、僕は何百、何千という夜を過ごしたのです。

高校生になって、いろいろな本を読むようになつた僕は、ついに長年の謎だった『アンナ・カレーニナ』を手に取りました。そのこ

ろにはさすがに「カレーの話でないだろうな」とは思つていましたが、茶色い書店カバーに書かれた「カレー」の文字列の印象は根強く、何かの食べ物に関する話かもしれない、とう思い込みがあつたような気がします。

僕は二週間かけて『アンナ・カレーニナ』を読み、半分くらい理解して、半分くらいよくわからないまま本を閉じました。僕が考えていた『アンナ・カレーニナ』とはまったく違いました。カレーも出てこなかつたし（どうか、「カレーニナ」も名前でした）、インドの冒険もありませんでした。

他の本を読もうという気にはならず、『イワンのばか』には手をつけませんでした。その後わりに、僕は『農協月へ行く』という筒井康隆の本を取り、SFに夢中になりました。父の本棚にあつた筒井康隆の本をすべて読み、小松左京を読み、レイ・ブラッドベリを読み、フレドリック・ブラウンを読みました。

今でも僕はたまに、子どものころに抱いた架空の『アンナ・カレーニナ』や『イワンのばか』のことを思い出します。いつか、アンナという女の子がカレーのある島を冒險する物語を書いてみたいものです。それはそれで、面白そだと思いませんか？